

燕石道成寺考

六輯

八

イロ 4 33
679
61



燕石十種第六輯卷八

道成寺考

大日本國法華經驗記卷下

第百廿九紀伊國年婁郡惡女

有二、沙門一人、年若其形端正、一人年老、共詣熊野、至年婁郡、宿路邊、宅其宅、主寡婦、出兩三女、從者宿居、二僧致志勞養、爰家女夜半至、若僧邊覆衣、並語僧言、我家從昔不宿他人、今夜借宿、非無所由、從見始時、有交卧之志、仍所令宿也、為遂其本意、所進來也、僧大驚、恠起居、語女言、日來精進、出立、遙途、參向、權現寶前、如何、有此惡事、哉、更不兼引、女大恨、怨通夜抱、僧擾亂、戲咲、僧以種種之詞、語誘參詣熊野、只兩三日、獻燈、明御幣、還向、之次、可隨君情、作約束、了、僅道



此一事參詣熊野女人念僧還向日時致種種儲相待
僧不來過行女待煩僧出路邊尋見往還人有從熊
野出僧女問僧曰著其色衣若老二僧來否僧云其
二僧早還向既經兩三日女聞此事打手大瞋還
家入隔舍籠居無音即成五尋大毒蛇身追此僧
行時人見此蛇生大怖畏告二僧言有希有事五
尋許大蛇過山野走來二僧聞了定知此女成蛇
追我即早馳去到道成寺車由啓寺中欲遁蛇害
諸僧集會議計此車取大鐘件僧籠居鐘內令閉
堂門時大蛇追來道成寺圍堂一兩度則到有僧
戶以尾叩扉數百遍叩破扉戶地入堂內圍卷大
鐘以尾叩龍頭兩三時計諸僧驚怖開四面戶集
見之恐歎毒蛇從兩眼出血淚出堂拳頭動舌指

本方走去諸僧見大鐘為地毒所燒炎火熾燃敢不
可逆即汲水浸大鐘冷炎熱見僧皆悉燒盡骸骨不
殘纔有灰塵夫經數日之時一箇老僧夢前大地直
來自老僧我足籠居鐘中僧也遂為惡女被領成
其夫感弊惡身今思拔苦我力不及我存生時雖
持妙法薰修年淺未及勝利決定業所牽遇此惡
緣今蒙聖人恩欲離此苦殊發無緣大慈悲心清
淨書寫法華經如來壽量品為我等二蛇拔苦非
妙法力爭得拔苦哉就中為彼惡女拔苦當修此
善地宜此語即以還去聖人夢覺即發道心觀生
死苦手自書寫如來壽量品捨衣鉢蓄設施僧之
營屈請僧侶修一日無差大會為二蛇拔苦供養
既了其夜聖人夢一僧一女面貞含喜氣色安穩

來道成寺一_ニ心頂_一礼_ス三_ニ寔_一及_ビ老僧_一白_テ言_フ依_テ清淨_ノ善_ニ我
等_ニ二人_一遠_ニ離_レ邪道_ヲ趣_ニ向_ス善趣_ニ女生_ニ忉利天_ニ僧昇_ル境_ニ率
天_ニ作_レ是_ノ語_ヲ了_テ各々_ニ相_ニ分_テ向_テ虛空_ニ而去_ル弘賢_曰此_ノ書_ハ
久_ク元_年撰_スす_ル首楞嚴院沙門鎮_源
後朱雀院ノ長

今昔物語集第十四

紀伊國道成寺僧寫法華救地語

今昔熊野ニ參ル二人ノ僧有ケリ一人ハ年老
夕リ一人ハ年若クシテ形良美麗也年婁郡ニ
至テ人ノ屋ヲ借テ二人共ニ宿リ又其家ノ主
寡ニシテ若キ女也女從者ニ三人計リ有リ此

家主ノ女宿リタル若キ僧ノ美麗ナルヲ見テ
深ク愛欲ノ心ヲ發シテ慙ニ勞リ養フ而ルニ
夜ニ入テ僧共既ニ寢ヌル時ニ夜半許ニ家主
ノ女竊ニ此ノ若キ僧ノ寢タル所ニ這ヒ至テ
衣ヲ打覆テ並ビ寢テ僧ヲ驚カス僧驚キ覺テ
恐レ迷フ女ノ云ク我が家ニハ更ニ人ヲ不宿
而ルニ今夜君ヲ宿ス事ハ晝君ヲバ見始ツル
時ヨリ夫ニセムト思フ心深ク然レハ君ヲ宿
シテ本意ヲ遂ムト思フニ依テ近ツキ來ル也
我夫死クシテ寡ナリ君哀ト可思也ト僧此レ
ヲ聞テ大キニ驚キ恐レテ起居リ女ニ答テ云
ク我レ宿願有ルニ依テ日來身心精進ニシテ
遙ノ道ヲ出立テ權現ノ寶前ニ參ルニ心ニ忽

ニ此ニシテ願ヲ破ラバ互ニ恐レ可有然レバ
速ニ君此ノ心ヲ可止ト云テ強ニ辞ス女大キ
ニ恨ミ終夜僧ヲ抱テ擾乱シ戯ルト云ヘ凡僧
様々ノ言ヲ以テ女ヲ誘ヘテ云ク我レ君ノ宣
フ車辞スルニ非ス然レハ今熊野ニ参テ兩三
日燈明御幣ヲ奉テ還向ノ次ニ君ノ宣ハム事
ニ隨ハムト約束ヲ成レツ女約束ヲ憑テ本ノ
所ニ返又夜曙又レバ僧其家ヲ立熊野ニ参ス
其後女ハ約束ノ日ヲ計ヘテ更ニ他ノ心无ク
シテ僧ヲ思テ諸ノ備ヘテ待ツニ僧還向
ノ次ニ彼女ヲ恐レテ不寄シテ忍テ他ノ道ヨ
リ逃テ過又女僧ノ遅ク來ヲ待煩ヒテ道ノ邊
ニ出テ往還ノ人ニ尋子問フニ熊野ヨリ出ル

僧アリ女其ノ僧ニ問テ云ク其色ノ衣著タル
若キ老タル二人ノ僧ト還向シツルカト僧ノ
云ク其二人ノ僧ハ早ク還向シテ兩三日ニ成
又ト云フ女此ノ事ヲ聞テ手ヲ打テ他ノ道ヨ
リ逃テ過ニケリト思フニ大ニ嘆リテ家ニ返
テ寢屋ニ籠居ス音セズシテ暫ク有テ即チ死
ス家ノ從女等此レヲ見テ泣キ悲ム程ニ五尋
詩ノ毒蛇忽ニ寢屋ヨリ出又家ヲ出テ道ニ
趣ク熊野ヨリ還向ノ道ノ如ク走り行ク人此
レヲ見テ大キニ恐レヲ成ス彼ノ二人ノ僧前
ニ立テ行クト云ヘ凡自然ラハ人有テ告テ云
此ノ後ニ奇異ノ事有リ五尋許ノ毒蛇出來テ
野山ヲ過ギ疾走り來ルト二人ノ僧此レヲ聞

思ハク定メテ此ノ家主女約束ヲ違ヌルニ依
テ悪心ヲ癸シテ毒蛇ト成テ追テ來ルナラム
ト思テ疾ク走り逃テ道成寺ト云フ寺ニ逃入
又寺ノ僧共此ノ僧共ヲ見テ云ク何事ニ依テ
走り來レルゾ僧此ノ由ヲ具ニ語テ可助由ヲ
云フ寺ノ僧共集テ此ノ事ヲ議シテ鐘ヲ取下
シテ此ノ若キ僧ヲ鐘ノ中ニ籠ノ居ヘテ寺ノ
門ヲ閉ツ老タル僧ハ寺ノ僧ニ具シテ隠レヌ
暫ク有テ大地此寺ニ追來テ門ヲ閉タリト云
ヘ凡起テ入テ堂ヲ廻ル事一兩度シテ此ノ僧
ヲ籠ノタル鐘ノ戸ノ許ニ至テ尾ヲ以テ扉ヲ
叩ク事百度許也遂ニ扉ヲ叩キ破テ蛇入又鐘
ヲ卷尾ヲ以テ龍頭ヲ叩ク事二時也寺ノ僧共

恐ル、ト云ヘ凡怪ムテ四面ノ戸ヲ開テ集テ
此レヲ見ルニ毒蛇兩ノ眼ヨリ血ノ淚ヲ流メ
頭ヲ持上テ舌嘗ズリシテ本ノ方ニ走り去ヌ
寺ノ僧共見ルニ大鐘蛇ノ毒熱ノ氣ニ被焼テ
炎盛也敢テ不可近付然レハ水ヲ懸テ鐘ヲ冷
シテ鐘ヲ取去テ僧ヲ見レハ僧皆焼失テ骸骨
尚シ不殘纒ニ灰許リ有リ老僧此レヲ見テ泣
悲ムテ返リ又其後其ノ寺ノ上躡タル老僧ノ
夢ニ前ノ蛇ヨリモ大ニ増レル大地直ニ來テ
此ノ老僧ニ向テ申シテ云ク我ハ此レ鐘ノ中
ニ籠メ置シ僧也惡女毒蛇ト成テ遂ニ其毒蛇
ノ爲ニ被領テ我レ其ノ夫ト成レリ弊ク穢キ
身ヲ受テ苦ヲ受ル事量无シ今此ノ苦ヲ抜カ

ムト思フニ我が力更ニ不及生タリシ時ニ法
華經ヲ持チキト云ヘ凡願クハ聖人ノ廣大ノ
恩徳ヲ蒙テ此ノ苦ヲ離レムト思フ殊ニ无縁
ノ大慈悲ノ心ヲ発シテ清浄ニシテ法華經如
來壽量品ヲ書寫シテ我等ニノ蛇ノ爲ニ供養
シテ此ノ苦ヲ抜キ給ヘ法華ノ力ニ非ズハ何
カ免ル、事ヲ得ムト云テ返去又ト見テ夢ハ
覺ヌ其後老僧此ノ事ヲ思フニ忽ニ道心ヲ發
シテ自テ如來壽量品ヲ書寫シテ衣鉢ヲ投テ
諸ノ僧ヲ請ジテ一日ノ法會ヲ修テ二ノ蛇ノ
苦ヲ抜カムガ爲ニ供養シ奉ツル其後老僧ノ
夢ニ一ノ僧一ノ女有リ皆咲ヲ含テ喜タル氣
色ニテ道成寺ニ來テ老僧ヲ禮拜シテ云ク君

清浄ノ善根ヲ修シ給ヘルニ依テ我等二人忽
ニ蛇身ヲ弃テ、善所ニ趣キ女ハ忉利天ニ生
レ僧ハ都率天ニ昇ヌト如此告畢テ各別レ空
ニ昇ヌト見テ夢覺ヌ其後老僧喜ビ悲ムテ法
花ノ威カラ彌ヨ貴ブ事无限實ニ法花經ノ靈
驗掲焉不可思議也斯ク蛇身ヲ弃テ、天上ニ
生ル、事偏ニ法花ノ力也此ヲ見聞ク人皆法
花經ヲ仰ギ信ジテ書寫シ讀誦シケリ亦老僧
ノ心難有シ其レモ前生ノ善知識ノ至ス所ニ
コソ有ラメ此ヲ思フニ彼ノ惡女ノ僧ニ愛欲
ヲ發セルモ皆前生ノ智ニコソ有ラメ然レハ
女人ノ惡心ノ猛モ事既ニ如此シ此ニ依テ女
ニ近付ク事ヲ佛法ニ誠ノ給フ此知テ可止也

トナム 語り傳へタルトカヤ

四筆に夢見ぞしとて一むを縁源よりかきとれりありは編み今く
法華經験記ふとくもとて見入る

此書は法華經言隆園での
筆傳あり此に白河院の美保

元亨釋書卷第十九

釋安珍居鞍馬寺與一比丘詣熊野山至年婁郡
宿村舍舍主寡婦也出兩三婢鑄二比丘珍有姿
貞中夜主婦潛至珍所通心緒初二比丘怪慰勞
之密至此始覺珍曰我細服豈閨閣之徒乎寡
居餘情溢于非類又可耻也婦人大恨傍珍不離
珍不得已軟諭曰我自遠地赴熊野宿志畜來久
神甚嫌淫穢者回不可歸途必來婦主姑待之女
喜而歸曉更珍早前路着神祠即便反經婦家而

不入急奔過主婦教歸程備供膳傍門伺路過期
不至適一僧過主婦問曰二比丘某物色熊野及
途有相見乎對曰如婦言二比丘我親而其沙門
去此恐二日前也耳婦聞大恐瞑乃入室不出經
宿為蛇長二丈餘出宅赴途奔馳而過路人噪亡
相語曰如此大蛇何為取路人々々相傳至珍所珍
思女化急馳入一寺寺名道成告衆乞救衆昏議
下大鐘置一堂納珍鐘裏堅閉堂戶已而大蛇入
寺血目饑口甚可怖畏衆僧走散蛇赴堂戶不闢
便以尾擊戶聲如鐵石戶漸辟蛇入堂應時四戶
皆開蛇乃蟠圍鐘舉尾敲鐘火燄迸散寺衆集者
無爭奈何移時蛇去寺衆倒鐘見中不見珍又無
骨尺灰塵而已其鐘尚熱不可觸也數夕一者宿

夢_ヲ二蛇來前_ニ一蛇曰我_ハ是前日鐘中比丘也一蛇婦也我_レ爲_ニ淫婦_ノ害己_ニ爲_ニ其夫_ト惡_一趣_レ苦報_{不_レ易_ニ救_レ脱_ニ而_モ我_ハ先身持_ニ妙法_ヲ萃_テ未_レ久_シ遭_レ此惡事_ニ微緣_{不_レ虛_ニ尙爲_ニ極因_ヲ願_ハ爲_ニ我_ハ寫_ニ壽量品_ヲ我等_ニ蛇定_テ出_テ苦道_ヲ我等來_レ寺願_ハ無_レ哀_一愍_テ覺_テ後大_ニ憐_ム乃_チ書_ニ壽量品_ヲ又捨_テ衣資_ヲ修_ニ無_レ遮_一會_ヲ薦_ニ二蛇_ヲ其_レ夜者宿_又夢_テ僧_一女合掌_ヲ告_テ曰我等因_テ師慈惠_ニ僧_ハ生_レ兜率_ニ女_ハ生_レ忉利_ニ語_レ已上_ル天_ニ}}

此書ハ後醍醐天皇の元亨二年虎関禪師撰する一ハあり僧の名を安孫と云こころ安孫のうらふ後と云ふ事ハ此書ハ姑く見えり

道成寺鐘銘 鐘今在京都妙滿寺

聞鐘聲 智惠長 菩提生
 煩惱輕 離地獄 出火坑
 願成佛 度衆生

天長地久 御願圓滿

聖明齋日月殿等等乾坤

八方歌有道之君四海樂無爲之化

紀伊州日高郡矢田庄

文武天皇勅願道成寺冶鑄鐘

勸進比丘瑞光

別當法眼定秀

檀那源万壽丸

并吉田源頼秀合力諸檀男女

大工山田道願 小工大夫守長

正平十四年_紀三月十一日

何乃幸_レ以_レ此_レ寺_ニに_レく_レり_レと_レい_レふ_レと_レ詳_カら_レん

南紀名勝畧志

日高郡

天音山道成寺

矢田庄土生村ノ中二有古ハハ法相宗タル由
今ハ天台宗也本尊十一面觀音並日光月光四
天王ノ木像各聖德太子作之由也當寺ハ文武
帝大寶年中紀ノ大臣道成奉行ト御草創ト
云ヘリ然レ不慥緣起二卷有リ畫ハ土佐將監筆
之由書ハ後小松院宸翰也ト云ヘリ或曰啓書
記之由此說可然書跡勅筆ト不見古之緣起ヲ
將軍義照卿由良興國寺來ル時披見レ奥書ヲ
加判形レ給フト也載元亨釋書
熊野遊記云道成寺即千手院為天台宗本尊千

手觀音也人皇四十二代文武天皇朝慶雲年紀
大臣道成奉勅草創在昔此寺本尊漁人綱出于
海中方今門前村家稱九海士里即其漁人九名
所居也云又此村呼做鐘卷村者人皇六十代醍
醐帝時年婁那處女慕旌僧到此不及忍念凝結
化為毒蛇終殺之躬亦沉沒江水云近時五尺童
知此故敢贅此地為海濱以細佛沉蛇事可知此
寺ニ所藏古畫卷相傳テ土佐氏祖宗ノ所畫其
詞章ハ則當時ノ紳縉家ノ手ニ成モノナリト
觀之書畫共精妙全卷處女慕僧事ヲ記レ而元
亨釋書ニ載ル所ト大同小異ナリ畫韻古雅ナ
ルコトハ實ニ三百年上ノモノナリ

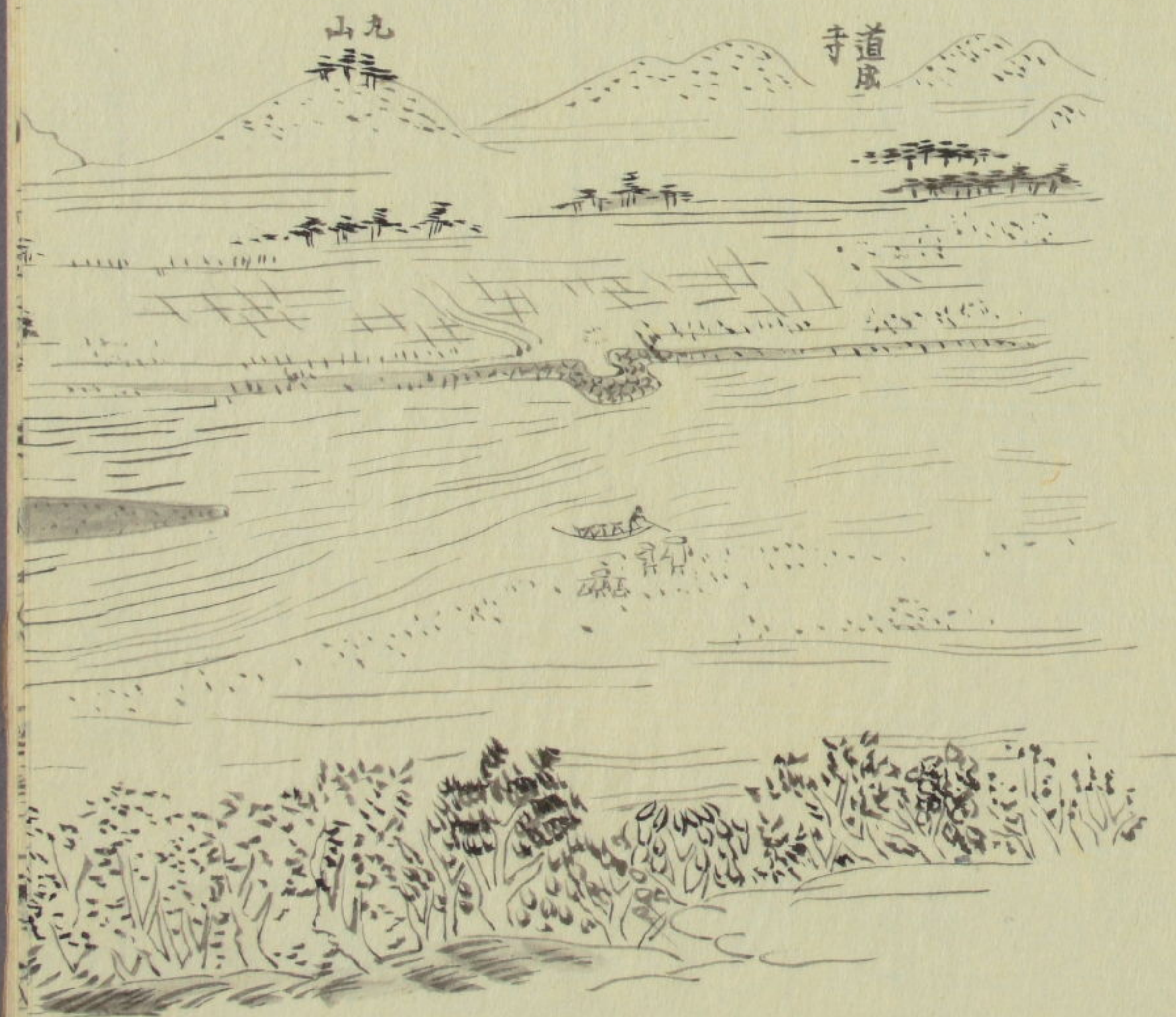
弘賢按子鐘銘及ハ世二書道成寺を文武天皇此勅願之

其の何と寺傳不接一候處一然きとも初紀ありの正史よきと
 居るに續日本紀の所見たう一伊呂波字類抄にも記さるに杖
 素田各記にも不見あり候一これハ初願といふ候一かゝる
 紀大臣道成といふ人も不審之文武天皇此朝の大臣ハ左大臣
 藤原の阿倍朝臣御入石と朝臣磨すて二人より左大臣とい
 大臣あると好一大臣の二字と一他ハ此漢よりやとおと
 紀氏系書にも不見あり續紀全編ハ左大臣といふ人二人ありとも
 一ハ巨勢朝臣也一と云ふ道成ありといふを桓武天皇の朝ハ今も
 左大臣福と云ふ人もありハ此の如くはるれ大寺を建立するといふ
 たとひ是の如くあり候一たとあり又たといふ道成二字と人名あり
 あらう佛典より採り候一にもさるべきにや

此圖ハ牟婁郡日高郡ノ方位及ビ熊野道成寺ノ所在ヲ
 見ルタメニ畧寫スル所ナリ



日高川
 一曰天田川大和十津川
 ヨリ分流シテ四十八里ニ
 シテ海江入ト云此圖ハ
 南岸天田村ヨリ日高
 ヲ願望ヒシ皇象ナリ



道成寺



村ツ子

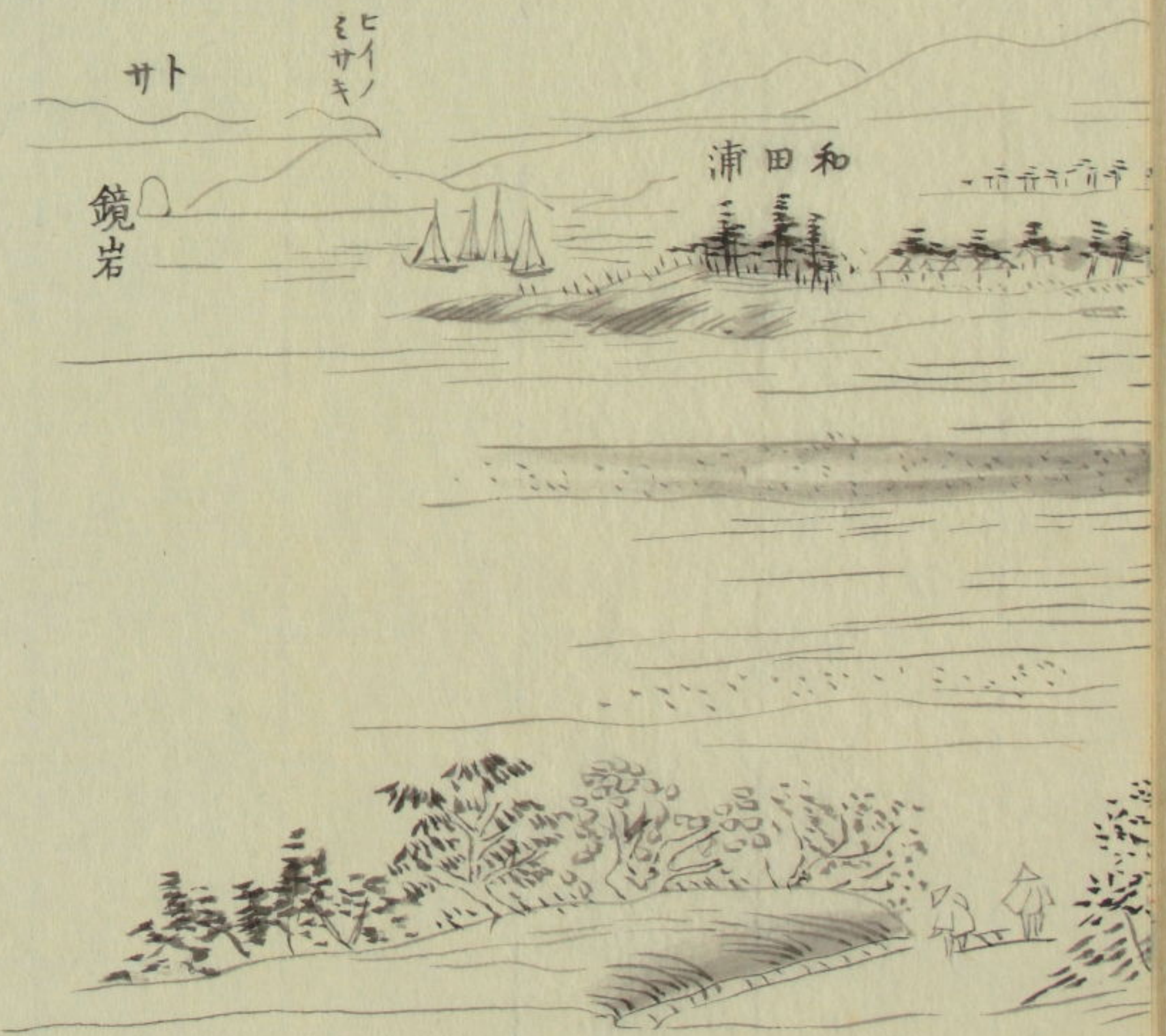
村原松

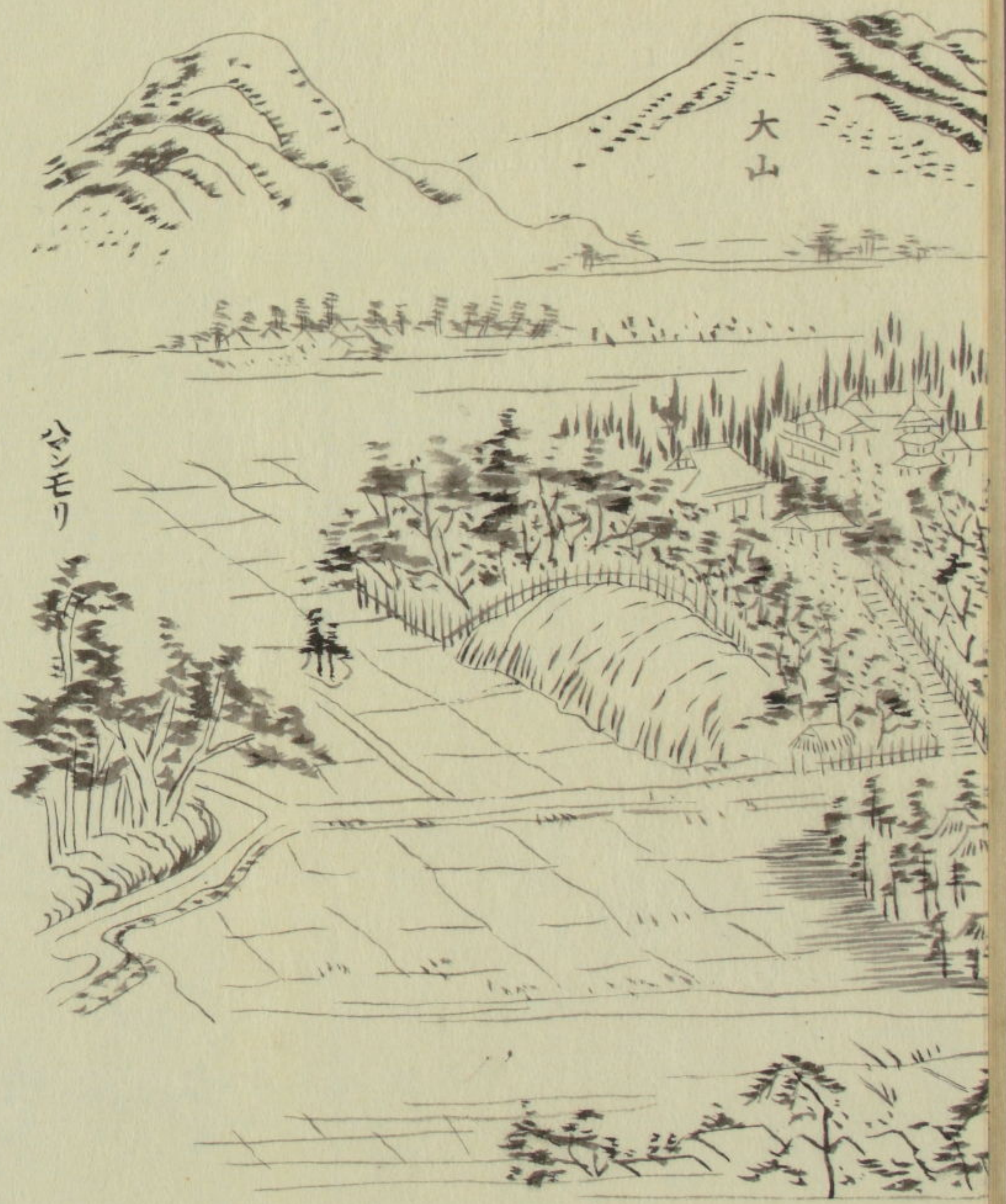
村田吉

サト
ミヒ
カキ

浦田和

鏡岩





右二張ノ圖ハ後桃園院ノ安永二年紀伊北園恭カ著セシ熊野遊記ノスル所ナリ

紀伊國日高郡吉田村

隆巻道成寺縁記

抑紀伊國日高郡吉田村道成寺とて人王四十二代文武天皇の御建也といふ
 本寺ハ内丈を寸八分圖浮檀金之十手觀世音菩薩海中より出現志多知の
 靈像少く殊に蛇身化益の内括靈驗新ふゆ一曰其六初郡此未活者に於て
 境内廣大なりて本堂樓門庫裏四席隆揚經藏堂を並に庭中
 今至以務免凡一子百餘年の星ををふこと以此とも無然るるに實ふ是
 國南中一此聖場之其由來以尋るるに古世遠りふ心八幡宮此社あり
 この社と道成寺とのる或三丁北入江より九海士の里と唱く九人の海人
 傳りて或は海中より光りてのりて遊人怪をわたりて近うに遊人の
 延也不思波の思ひて老る知るを海底に今探り求ふ終ふこの赫
 奕たる靈像以得たり遊人奇異の思ひをわたりて古世より來りて
 葉は菴をむとび安んじたりと朝夕此菴禮いと福んたり也と云ふ

或夜冥像卷人の枕よふまを給ひて白女我小なる事他事あり女は
能くしらばりてと卷人着中よまをりやう我別ふ然ひ事あり
只ま人の娘を扶けりて今ふありて改發生せ居大慈の佛力を以て改發
を生せさせ給へと唱作せると見くと愛見より奇持あり我聖百より
娘の冥發生しとく丈夫余より卷人歎弄とく此の髪のは一筋ふても
人小端きと拾へば別樹の枝よ並けり改發ありてとくとまり違へり
帝歎ふあり紫宸殿の朝陽ふ葉を喰りて或付帝歎憤ありとく
女の髪節雀の巢より多きと地よ届きと事不思議ありとく
かの巢を而しせ見ありて女人の冥發ふ然あり別樹の髪れまを奪りとの
宣告ありて夢く國を尋ねる事終り紀伊玉日高郡吉田村九海士の
里ふありかの髪を奪得て都小帰りとの由奏聞しち色ハ別樹を
百よりせふ稀ありて英婦人ありち色ハ后のふふ髪を奪給ひけるあふ
后と雨より日少い必も顔ふ涙を多きと物悲き風信ふ見之給へば帝怪し

そを扱を留給へば后對て曰我古の業は居ふ安んじとあり歎きあり
兩此日ハ居室漏く濡らせ給へん事ん歎くこと給を治りやとく
帝歎憤ありて扱も有佛神がさくふ一字を経營ありと誓んこと
紀の大后道成よ傳へ七堂伽藍を御建立せとて天言心道成寺と
号しかの靈像を安置しと九人の海士人をも神ふ夜を給ひ九海まよ
と誓ひて今も吉田村の久居ありて例系絶を法人是以て敬すとて
弘智曰これハ女改元年回向院とて用帳の時平けりて弘り不あり文武天皇の初成ふ
あはれとてすすふと辨すまがとこの帝の由后の後海と一女産ふとすりありかふ
此續もありゆきとてとくを海士のあを給ひてとて事ハ添くもめきとてあり

安徒 田各物 結

道成寺縁起ハ竹まき一つの物語あり人皇六代醍醐天皇の御宇に美列河川
といふ処に安徒といふ僧あり常ふ三徳野をそとけり心伏の安とありて

無_レ隱處僧伏_レ之_ラ大鐘ノ内ニ人_三徒_ヲ守_レ鐘ノ旁ニ女至_レ三僧戯_レ闕_ニ逐_レ之
女不得_レ松壽_ヲ仰_レ哭_ニ如_レ癲出門_ヲ去_レ僧啟_レ鐘_ヲ有_レ声女還_テ奔_リ入_ル方_ニ欲
爲_レ惡_ヲ忽_レ披_レ髮<sub>改_メ形_ヲ入_ル鐘_内普德與_レ諸僧繞_レ鐘_ヲ呪_ス之_ラ女自鐘
倒_レ無_レ首_ヲ出_シ見_シ鬼面_ヲ手_一又_下擊_ニ諸僧_ヲ僧_咒不_レ已_テ寺外大_ニ雷_電
女化_レ麻_鬼走出_テ不知_レ所在_ニ世ふりりり_レ佛_優の道_成寺_{あり}り_て造_りり_之</sub>

文久三年癸亥十月下浣於燈下_一校了

書僧

花屋主人岩平蛙麻呂

明治二十二年滿生

筆者

妻_ハ賴_德



